

▼67年の三派全學連結成時の他派との対応

——塙見さんは学対部長だから、当然、66年の三派全學連結成の舞台裏を見ているわけですよね？立ち上げのときとか。「応執行部をあげると、委員長が斎藤克彦（明大、ブント）、副委員長が蒲池祐治（同志社大、ブント）と高橋幸吉（早大、解放派、書記長は秋山勝行（横国大、中核派）となっています。中核派・解放派との折衝なんかほんなものだったんでしょう？」人事の折衝なんかもある程度裏でやった。僕らが全學連の委員長を取るというのは他派も認めていて、中央委員の割り振りとかで、中核派と社青同解放派の幹部が四、五人ずつ出て少しもめただけど、一応まとまつてきました。明大的学館でやったが、全国の大学自治会を点検し「ここはウチだ、そこは〇〇だ」とかやるわけだが、学部自治会だと旗色が曖昧で競合しているところがあるから、代議員の取り合になる。一触即発の雰囲気も生れたが、なんとかまとまりました。

数からしたら解放派は全国的にはほんどないに等しい。解放派には一番上に佐々木慶明（溝口弘人）がいる。その次に反戦青年委員会やつてある人物がいて、その下に浅田とかがいた。

それにしてあの三派全學連の結成大会は歴史的な事柄だった。第四インターも加わった各派が全国の活動家を総動員した。明大記念館が一杯になった。のべ三千人はゆうにいた。ここで各派が政治論や革命論を言い合い論戦し、最後は方針を探査し、人事を決定した。あのときのインターや国際学連の歌声は記念館を揺り動かしただけでなく、お茶の水、神田界隈を震撼させた。何かが出来る感じたね。

中核派は、小野田穣二、吉羽忠、秋山勝行の三人が中心でした。小野田が学対委員長、僕と張り合っていた。小野田くらいだったら、先輩だがこっちは量も多いし、圧倒できた。ところが、67年の明大学費闘争では小野田が全學連のヘゲモニー取りの失敗などで飛ばされて、60年安保ブントの全學連書記長で中核派の実力者だった清水丈夫が陣頭指揮にててきました。清水はさすがに場数を踏み、僕などとは格が違っているわけで、すっかり搔き回されてしまった。明大闘争が混乱して、結局、斎藤（ブント）が全學連の委員長を解任され、中核の秋山にバトンタッチということになつた。それから、清水が学対の実施指導をやつていたような感じです。

清丈（メチャクチャな男）だからね。僕の遙かに上手を行くんだ。明大闘争のすぐ後、68年の三派全學連は中核と反中核に割れますが、そういう現場指揮は全部彼ですよ。たとえば、法政の授業料闘争なんかでも、徹底抗戦だけやればいい。他党派に右派として衝け込まれなければいいといった方針で、小人数でも徹底抗戦して負けてもいい、授業料で勝つとか勝たないとか関係ない。「大学当局と妥協しなければ組織は持つ」という方針だ。そういうメチャクチャな方針を出すわけです。

明大闘争でも、中核派が突き上げた。それがあおられて、総長交渉のとき、明大講堂に三派全學連を入れて全部封鎖したわけ。それで体育会とガバールになった。島岡監督の指揮で野球部は、今、阪神の監督になっている星野仙一らや、ラグビー部の北島配下のデカイ部員、柔道部の有名な曾根とかの猛者が出てきて、「時は粉砕したんだけど、明大は体育会の『戒厳令』みたいになつてしまつたんです。なにしろこつちは、交渉の結果をめぐつて三派で分裂騒ぎがあつて、殴り合いになつてる状況ですからね」。

体育会は、「外人部隊」を一人ひとり捕まえて殴つていた。僕も捕まつて、明治の学館みたい

などころに放り込まれ、「こりやもうやられるな」と思つたら、何を勘違いしたか、「こいつは親玉だから、神田署に突き出して犯罪者にしらやおう！」（笑）となつた。殴られる前に神田署に連れて行かれたんだけど、神田署は全然事情を知らないから、「お前そんなことするなよ」で釈放です（笑）。とつと、逃げた。谷という中核の外人部隊の幹部と一緒にでした。内側では中核と解放に殴られながら、体育会には殴られ、あの時ブントは満身創痍という所でしたが、あれは、命拾いしたと思っています。

▼67年、明大学費闘争の実際

——明大闘争の真相は？

最近、「情況」をやつていた当時のブントの政治局員だった古賀選に聞いたんです。どこまで本當かわかりませんが、全學連委員長の斎藤克彦、古賀選、松本礼二、廣松涉、篠田なんかも絡んで、理事会とある程度の話はついて、授業料の値上げはしないどころまで行つた。ところが、三派全學連がバーンと明大講堂の総長との交渉の場に突入したものだから、一挙に理事会が硬化した、と彼は言うんです。

明治は本当に「タコの足」で、伏魔殿って感じ。すごく複雑な人間関係があるんです。事情をちゃんと踏まえて動かない、裏でボス交とかいろんな動きがある。結局そういうふうに動いてそれで、中核派の秋山と全學連委員長の交替があつて、マル戦派の成島忠夫が副委員長となつ

て収めた。成島は10・8と11・12の羽田闘争を闘い、分裂後マル戦派でただ一人武装闘争まで行く血の多い男だった。

そこまで行くと、今度はマル戦対統一ブントの党内闘争が始まる。責任問題なんかも含めて、マル戦派は徹底抗戦なんです。明治のことを知らなかつて、単純に行けばドンドンの徹底抗戦。その闘いのなかで、米田隆介（元）とか、兩川敏雄（元）とか、亡くなつた米山（元）とか、そういう連中が育つていくわけです。独立社学同のグループはそこでいなくなつた。

僕は時々明治の二部の連中の面倒をみたりしていた。早稻田の村田能則（元）が来て、重信房子らと一緒に学習会などをやっていましたね。重信には関西ブント直系みたいな自覚があつたと思う。明治の一部はもつとトータルなブントの指導を受けていたから、二部は関西ブント直系的で雰囲気ちょっと違つていたと思いますね。